様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　研究成果報告書

令和２年５月 31 日現在

機関番号：14602
研究種目：奨励研究
研究期間：2019
課題番号：　19H00131
研究課題名：幼小一貫した資質・能力を育成する「育ちの履歴カリキュラム」に関わる研究

研究代表者
松田　登紀（MATSUDA, Toki）
奈良女子大学附属幼稚園・教諭

交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：470,000 円

研究成果の概要：
本研究では、幼小一貫した実践から「育成したい資質・能力」を描き出す3歳～5歳の「育ちの履歴カリキュラム」を編成するにあたり、教師の意図や願いが視覚的に読み取れるようデザイン開発を行うことを目的とした。
カリキュラムをデザインする過程において、以下の成果が見られた。(1) 実践者が無自覚であった資質・能力の観点を記録写真に再発見することになり、実践でより資質・能力を意識するきっかけとなる、(2)実践写真を基に他者と対話をすることにより、自らの保育観を自覚することにつながる、(3)写真は公開した時から見る側の経験に理解を委ねる特性をもつ。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、資質・能力で一貫した幼児教育と小学校教育の実践から、子どもの育ちの履歴を資質・能力ベースのカリキュラムとして立ち上げたカリキュラムデザインの提案である。特に「見えない教育」と呼ばれる保育の意図や教師の願いが視覚的に読み取れるよう、「写真」を媒体としたカリキュラムデザインに挑戦している。
本研究の成果としてのカリキュラムは一事例に過ぎないが、「写真」という媒体を用いることによって実践者自身の専門性が高まることや、「写真」という媒体の限界が明らかになったことは、今後の保育者の専門性向上に資する研修や保育者養成の在り方について重要な示唆を得るものと考える。

研究分野：幼児教育・保育学

キーワード：カリキュラムデザイン　資質・能力　写真

１．研究の目的

幼児教育現場において、新幼稚園教育要領に示されている「新しい時代に求められる資質・能力」の育成、「小学校教育との円滑な接続」の重要性は認知されているものの、実際には資質・能力ベースで円滑な幼小接続を踏まえた教育課程をすでに編成している園は多くない。これには、「資質・能力の育成」とは何か、「円滑な接続」とは何をつなぐことなのか、という具体が現場で理解されにくいことに一因があるように思われる。
本研究では、幼小一貫した実践から「育成したい資質・能力」を描き出す３歳～5 歳の「育ちの履歴カリキュラム」を編成するにあたり、特に環境を通して行う幼児教育の特性をふまえ、環境構成や素材選択を写真や絵を用いてデザインすることにより、教師の意図や願いが視覚的に読み取れるよう「育ちの履歴カリキュラム」デザイン開発を行うことを目的とする。これによって、本来見えない教師の意図や願い、子どもの気づきや学びをわかりやすく表現できるようになり、活動中心のカリキュラムから「育成したい資質・能力」を表現するカリキュラムへの理解が進むと考えられる。
方法として、中期的スパンで保育実践を振り返る中で、これまで無自覚で明示化してこなかった「育成したい資質・能力」の育ちが現れている子どもの姿や育ちを支えた環境構成および教師の援助等を、研究協力者との対話により言語化し、写真を用いてデザインする。

２．研究成果

（１）言語化しカリキュラムとしてマッピングをした資質・能力に近い子どもの姿を表現した記録写真を選ぶ―資質・能力を視点に実践を振り返る

実践写真を撮影する際には「記録」の意味合いが強く、資質・能力を意識していない。本研究により、実践写真の中に資質・能力を再発見することになり、実践でより資質・能力を意識するきっかけとなった。

（２）言語化しマッピングした資質・能力と同位置に写真を配置する
―写真を資質・能力でマッピングし、共通する子どもの学びや育ちを確認する

複数枚の実践写真を配置することで、その共通点として子どもの育ちや学びが視覚情報だけで見出せるのか検討した。その結果、複数枚の写真が提示されることで、見る側は教育内容にまつわる情報に捉われてしまうことが明らかになった。また、本来長期的スパンで捉えている育ちや学びを、一瞬で切り取った写真で他者と共有可能なのか、課題が残った。

（３）自分が考えている資質・能力がカリキュラム及び実践写真から「見える」のか、対話をする
――一枚の実践写真を基にした対話により、他者とのズレを自覚する

実践写真を基にして資質・能力や教師の意図が読み取れない場合、自分の見方を言語化し、子どもの姿やエピソードから子どもの学びや育ちを具体的にすることにより、自らの保育観やまなざしの癖を自覚することにつながった。視覚情報の多い写真では、見る側に理解を任せることになるので、明確な意図がある場合は、見方を誘導する工夫が必要となることが明らかになった。

（４）経験知により実践写真から想起されやすい資質・能力があることを理解する

保育実践には、園文化が異なっても同様の教育内容が見られることがある。ここでは、本来個別の子どもの育ちや学びが教育内容で一括りにされ一般化されて語られることがある。これは、教師の経験知により似通った遊びを自分の経験を通して理解していることによる。つまり、表現したい資質・能力によって開かれた写真を用いるか否かを意識する必要があることを理解した。

（５）実践写真でカリキュラムをデザインする際の「写真」のもつ意味を考察する

「写真」では撮影前の思考を表現するのは難しく、写真を公開した時から見る側の経験に理解を委ねる特性をもつことが明らかになった。そこで、写真には言語化した資質・能力を添えるデザインに変更した。

（６）課題

「写真」という媒体は、保育実践を言語化した文章よりも情報量が多く、一見保育が可視化されたような錯覚に陥るのだが、実際には撮影する側・読み取る側の教育観や意図、経験知により解釈がかなり異なり、結果的にカリキュラムへの共通理解を阻むという課題を残した。

一方で、今ここで生きている子どもと私たちの協働する保育実践を切り取る際、複雑で曖昧な保育実践を「写真」という媒体で切り取る行為とその後の対話によるリフレクションによって、自身の眼差しを言語化し、意図を言語化することが保育者としての専門性を高める可能性を見出した。

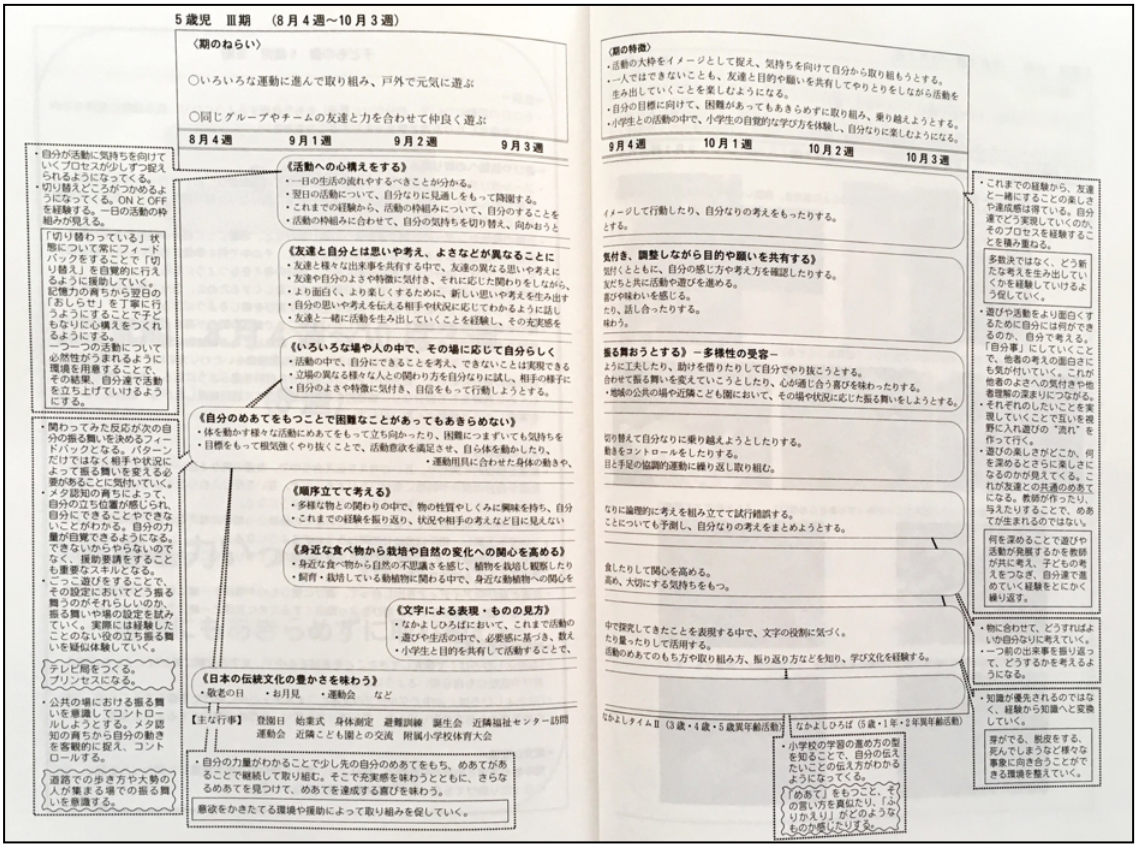

図　育ちの履歴カリキュラム例　５歳児　Ⅲ期

３．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　５　件）

① 奈良女子大学幼年教育研究会（松田登紀、柳沢卓、飯島貴子、柿元みはる、辻岡美希、角田三友紀、鎌内菜穂、越智裕子、福西まゆみ）、教育課程、査読無、32 集-Ⅰ、2020、1-167　DOI:なし

② 奈良女子大学幼年教育研究会（松田登紀、柳沢卓、飯島貴子、柿元みはる、辻岡美希、角田三友紀、鎌内菜穂、越智裕子、福西まゆみ）、指導計画、査読無、32 集-Ⅱ、2020、1-154　DOI:なし

③ 松田登紀、「子どもスタートの教育」におけるカリキュラム・デザイン、査読無、32 集-Ⅰ、2020、4-18 DOI:なし

④ 松田登紀、「子どもスタートの教育」における評価、査読無、32 集-Ⅱ、2020、133-142 DOI:なし

⑤ 松田登紀、実践知から立ち上げる資質・能力ベースのカリキュラム開発プロセス-「育ちの履歴カリキュラム」を事例として-、教育システム研究、査読無、15 号、2020、印刷中

〔学会発表〕（計　３　件）

① 松田登紀、幼小一貫した資質・能力を育成する「育ちの履歴カリキュラム」に関わる研究、日本保育学会、2020 年 5 月 16 日、予定地は奈良教育大学（奈良県奈良市）であったが、新型コロナウィルス感染拡大防止のため参集せず

② 松田登紀、「育ちの履歴」から編成するカリキュラム-幼小一貫した資質・能力を育成する-、奈良女子大学附属幼稚園公開保育研究会、2020 年 2 月 8 日、奈良女子大学附属幼稚園（奈良県奈良市）

③ 松田登紀、幼稚園教育における資質・能力を育成するカリキュラム・デザインの現状と課題、日本乳幼児教育学会、2019 年 12 月 8 日、東北文教大学短期大学部（山形県山形市）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕（計 0 件）

〔その他〕（計 0 件）

４．研究組織

研究協力者

研究協力者氏名：柳沢　卓、飯島　貴子、柿元　みはる、辻岡　美希、角田　三友紀、鎌内　菜穂、越智　裕子、福西　まゆみ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。